

保育者の新しいノート (5)

S. K. 生

(1)

○春が来た。幼稚園に来た。庭に来た。保育室に来た。遊戯室に来た。わたしたちの待つていた春だ。よく迎えなければならぬ。その用意はいまだろうか。

○窓のガラスをよくふこう。せつかくの春の光が、くもつたガラスでは戸まどいするだろう。そうして、よけて行ってしまうかも知れない。ほこりのまゝのガラス窓にさす春の日、半屋じやあるまいし。

○部屋を隅々よく掃除しよう。冬の間がたつて掃除しないことはない。しかし、窓をあけきれない掃除は、隅々のごみを残した。殊に戸棚のうしろ棚のかげ、春の光はそうした隅々にもさすのに。たゞの掃除では足りない。春のあかるい光に色のはげたところが気になる。

○額に繪がらはどうか。戦争中の殺風景な額はとうにはずしてある。しかし、殺風景でない風景畫にしても、冬木立、雪の山は、この春日のものではない。春よ来い、と子どもさんたちが歌つても、それだけでは額の枯木に花が咲かず、山の雪は溶けない。

○くすんだ壁を塗りかえることは出来ぬ。しかし、よくすゝを拂えば、見ちがえる程あかるくなる。大きいことより小さい部分に、意外問題があるものだ。春を迎えるについても。

○春を迎える心で庭を見ると、もう春がそこにもこゝにも来ている。それなのに、

—あゝなんと心なき主よと春にいわれそ
うな散らかりかただろう。片づけよう。掃
こう。なんといつても春光の一番の御座敷
は庭だ。

(2)

○きれいにするばかりではない。春を見落しては向すまない。小さく出た木の芽、草の葉、そつと咲いている小さい花、春はそんなに前ぶれして行列をつくつてばかり来ない。その春の行進も楽しいが、その前にちらりほらり、足音ひくゝ忍びよる春の子は尙かawaii。それを迎えそこなつてはならぬ。

○冬の終りのある暖い日からつけ初めた私の「春待ち日記」を、毎日忘れずにつけよう。何日、南風。何日、やわらかい雨。何日、小鳥の聲。何日、花幾輪。何日、小さい蝶々。何日、空の色。何日、ふと浮んだ春の歌一首。

○春を外に迎えると共に内に迎える用意もまた忘れまい。俳句集春の部や和歌集春の部を再びとり出して、好きな詩をぬき書きしよう。そうして、その詩にふさわしい色のチョークで小さく黒板のはしに書いて置く。その中に私の句や歌を書いておくのも一興。人に見られては恥しいが、春は私の歓迎を快く受けて呉れるだろう。

○更に、この明るく温い春を迎える私自身の心の用意は……？子どもたちには、みんな、ちゃんとその用意がとものつてい
るが！